

1. Mitochondrial diseases are baffling genetic disorders.

この文は S+V+C の第2文型になっています。

S の部分は名詞 mitochondria の形容詞形である mitochondrial が、名詞 diseases を修飾しています。C の部分は名詞 disorders が中心で、これにまずは形容詞 genetic(名詞 gene の形容詞形)がかかって genetic disorders「遺伝子の異常」となり、これにさらに baffling がかかっています。baffling は動詞 baffle の現在分詞で、意味を確かめるためには baffling だけでなくもとの動詞 baffle も合わせて辞書で引くとよいでしょう。

2. They range from mild to deadly, can occur early in life or late, and have no cures and few treatments.

まずは全体の構造を確認しましょう。2. [S]They [V₁]range ..., [V₂]can occur ..., and [V₃]have ... という形になっており、3つの述語動詞が A, B, and C と並列されています。なお、主語の They は第1文の Mitochondrial diseases を指しています。

range の意味を見きわめるためには、これが range A from B の形で用いられている点を確認したうえで、辞書の語法表示を参照しながら記述を検討していくとよいでしょう。基本的には「A から B までに及ぶ」ですが、具体的な訳は辞書の用例の訳なども参考にして決めましょう。

can occur ... の部分ではまず、理論的可能性の意味を表す can に注目しましょう。「～できる」という能力の意味ではありません。訳語は辞書を見て決めましょう。occur の意味はさほど難しくないですね。early in life or late の部分については、early と late の対比に注目すると、early in life と late (in life) というように、late の後に in life が省略されているのではないかと判断することができるでしょう。

have no cures and few treatments の部分は少々やっかいです。cure と treatment の意味の違いをしっかりと見きわめましょう。動詞の cure / treat の意味をあわせて確認するとよいですね。また、こうした微妙な意味の違いは英英辞典を引くとすっきり理解できる場合も多いので、一度見てみるとよいでしょう。cure は「完全に治療すること」、treatment は「症状を軽くすること」を基本に考えてください。treatment についている few は「ほとんど～ない」という意味です。a few「少数の～」との違いをし

っかり覚えておきましょう。

3. They are named for the tiny organelles, scattered throughout every cell of the body, that convert food into energy.

この文のポイントの1つは挿入句です。挿入句は..., [挿入句], ...という形をとり、独立した句がカンマにはさまれている点と、挿入句の前後の内容がきれいにつながる点がポイントです。挿入句はいったん外して考えるのが基本で、この文の挿入句を外すと **They are named for the tiny organelles that convert food into energy.** となります。このようにすることで、**that convert ...**の **that** が関係代名詞で **the tiny organelles** を修飾しているのがわかりやすくなりますね。

最初の **They** は第2文の **They** と同じく、第1文の **Mitochondrial diseases** を承けています。主節は **name A for B** の受動態 **A is named for B** となっています。動詞 **name** を辞書で引いて成句欄を見てみましょう。「**B** にちなんで **A** を名づける」といった意味であることがわかるはずです。**for** に続く **the tiny organelles** では **organelle** という専門用語の意味をしっかりと確認しましょう。「細胞(小)器官」という意味ですが、**tiny** にも「ごく小さい」という意味があるので、意味が重複しないように考えてください。なお、**the** は名詞に簡潔代名詞節がついて限定されているためについているものと考え、特に訳出しません。**the** は必ず「その」と訳すとはかぎりません。こうした点にも少しずつ慣れていきましょう。

挿入句はいったん外して、関係代名詞 **that** 以下を見ていきましょう。もう一度確認しますが、**that** の先行詞は **the tiny organelles** です。この節では **convert A into B** がポイントです。「**A** を **B** に変える」という意味で、前置詞 **into** が「変化の結果」を表す点をあわせて確認しておきましょう。**change A into B / turn A into B** などの **into** も同じ意味を表しています。

それでは、挿入句である **scattered ...**の部分を見ていきましょう。まず、これが過去分詞である点を確認してください。後続の **that** で始まる関係代名詞節と同様に、**the tiny organelles** を修飾しています。**scatter** は「ばらまく」が基本ですが、辞書を見るとわかるように、受動態になると「散在している」といった意味になります。**throughout** ~「~全体に」の意味ともうまくかみ合うわけですね。この後の **every cell** が単数になっている点に注意しましょう。1つの細胞全体に散らばっている、という意味になります。「どの細胞にもある」という意味ではありません。単数・複数の違いによってこうした意味の違いが表されることがあるため、文法的な数の区別が重要となる場合があります。of the body の **the** ですが、これは「総称」の意味で用

いられています。総称とは、あるもの全体を一般に指す意味・用法です。辞書で **the** を引いて、該当する用法の説明をしっかりと読んでみましょう。これも「その」とは訳さない点を確認しておいてください。

なお、全体をどう訳すかですが、挿入句を除いた部分をいったん全部訳してから、**scattered ...**という挿入句の部分を補足説明になるように続けるとよいでしょう。

4. **These power plants contain a small amount of DNA—distinct from the chromosomes in the egg’s nucleus—that is only passed on from mother to child.**

この文も挿入句を含んでいます。記号—は「ダッシュ」という名前で、第3文の **can** とほぼ同じ意味を表します。したがって、この文でも—**distinct from the chromosomes in the eggs nucleus**—の部分はいったん外して考えましょう。**These power plants contain a small amount of DNA that is only passed on from mother to child.**となりますね。第3文と同じように **that is ...**の部分は関係代名詞節になっています。

それでは主節から見ていきましょう。**These power plants** は第3文の **the tiny organelles** を指しています。**power plants** を辞書で引くと「発電所」や「動力装置」という訳語が見つかりますが、どちらの訳にするかは第3文の内容、特に **that convert food into energy** との関連で考えましょう。**a small amount of ~**は「少量の～」という意味です。**a(n) [形容詞] amount of ~**で「[形容詞]な量の～」となります。辞書で用例を参照するとともに、どんな形容詞が用いられるのかもあわせて確認しておきましょう。**DNA** はよく知られた用語ですね。用語として十分確立していますから、そのまま「**DNA**」と訳して問題ありません。

続いて **that ...**以下の関係代名詞節を見ましょう。動詞 **pass** は **pass A on from B to C**「AをBからCに伝える」という形で用いられており、これが **A is passed on from B to C** と受動態になっています。ここでは遺伝の意味が含まれるので、具体的な訳語はその点を考慮して決めましょう。もう1つこの部分で問題となるのは **only** の用法です。この **only** は文の中位に副詞を置く場合の典型的な位置、すなわち **be** / 助動詞の後、一般動詞の前に置かれています。この位置にある **only / also / even** などは、直前・直後の要素を修飾するとはかぎりません。**only** がどの要素にかかるか、ミトコンドリア **DNA** に関する知識や全体の意味を考慮しながら考えてください。

それでは、挿入句の部分を検討しましょう。形容詞 **distinct** が中心となっており、

a small amount of DNA を修飾しています。distinct from ~で「～とはまったく異なる」という意味になります。the chromosomes には in the egg's nucleus がかかっており、chromosomes に the がついているのはこのためです。この the も訳しません。chromosome / nucleus は細胞に関する専門用語ですね。egg も専門的な意味で解釈する必要があります。

全体の訳しかたは第 4 文と同じように考えるとよいでしょう。挿入句の部分を最後にもってきて、補足説明のように訳します。

5. Once detected, mitochondrial diseases put parents in a bind.

全体の構造は、後半の主節に Once detected がかかっています。Once detected の部分は Once they are detected という副詞節の S+V を省略して Once ~~they are~~ detected としたものです。副詞節と主節の主語が共通である場合にこの省略が可能で、省略された they の指示内容は mitochondrial diseases です。once には副詞の用法と接続詞の用法があり、ここでは接続詞として用いられていて「いったん～すると」という意味です。辞書でも確認しておきましょう。detect の訳語は mitochondrial diseases との関係で考えてください。

主節の検討に移ります。[S]mitochondrial diseases [V]put [O]parents [C]in a bind という構造になっています。補語の in a bind は成句で「困って」「苦境に立って」という意味です。この文は無生物主語構文になっているので、そのまま訳すと日本語ではぎこちなくなってしまう。この文の場合、無生物主語である mitochondrial diseases を原因・理由と解釈し、parents を主語にとらえなおして訳出します。無生物主語構文にあまりなじみがないのであれば、この機会に文法書で詳しく学習しておきましょう。英語では無生物主語構文が多く用いられるので、後々きっと役に立ちます。

6. Indeed, Shaw worries that her 2-year-old son, Liam, will suffer.

この文は Indeed で始まっています。これは前の部分の内容をより具体的に展開していることを表す副詞で、ここでは「そして実のところ」と訳するのがよいでしょう。次のポイントは、worry が that 節を従えている点です。「～ではないかと心配する」と考えます。that 節の内部は[S]her 2-year-old son [V]will suffer に Liam が加わっています。この Liam は同格名詞句と呼ばれるもので、前の名詞 her 2-year-old son の言い換え、ないしは補足説明になっています。同格名詞句の多くは前の名詞とカンマでつながって A, B という形となり、たとえば「B という A」「A である B」「A

つまり B」といったように訳します。文法書で例文とその訳を検討しながら何通りかに訳してみて、いちばんしっくりくる訳しかたを採用しましょう。

7. Although he looks fine now, she says, if she had known about her disease early, “I would have never had a baby.”

この文には..., she says, ...という挿入節が含まれています。基本的には挿入句と同じように考えればよいのですが, say が that 節を従える点にも注目して, いったんもとの形に戻しておきましょう。She says that although he looks fine now, if she had known about her disease early, “I would have never had a baby.”となります。訳す際には「～だと彼女は言う」という形で, she says に相当する部分を最後にもってくるのがよいでしょう。

挿入節をいったん外したうえで, 文全体の構造を検討しましょう。3 つの節で構成されていますね。接続詞を含まないのが主節なので, “I would have never had a baby.”が主節だとわかります。この部分だけが“...”とダブル・クォーテーション・マーク(引用符)で囲まれているのは, ここが she {= Sham} の実際の発言をそのまま引用したものだからです。この主節に, まずは if 節がかかっており, さらに although 節がかかっています。主節に近いもののほう, つまり if 節のほうが意味的な関係も深いと考えるとよいでしょう。

although / though は注意を要する接続詞です。これらは when / because / if などを代表とする従属接続詞の 1 つです。従属接続詞は従属節を導く働きをし, 必ず従属節の先頭に置かれます。たとえば because S+V は「S が V なので」と解釈しますね。although の場合もこれと同様に考え, although S+V で「S が V だけでも」と訳します。although を「しかし」ととらえ「しかし S+V」とする間違いが多く見られるので, 十分注意しておきましょう。

この although 節の内容は特に問題ないでしょう。look は第 2 文型で用いられており, 「～であるように見える」ととらえます。now は前の文の will が表す未来との対比で用いられていると考えて解釈してください。

続いて if 節を見ていきます。ここに過去完了形が使われているのは, 主節とあわせて仮定法過去完了になっているからです。事実と異なる仮定をして, その結果を推量する, というのが仮定法の基本的機能で, if 節が仮定の内容, 主節がその結果を表します。仮定法には, 過去形を用いる仮定法過去と, 過去完了形を用いる仮定法過去完了とがあり, 仮定法過去が現在の内容, 仮定法過去完了が過去の内容を表します。時が 1 段階ずれている点に注目しておきましょう。この文で

は仮定法過去完了が用いられているので、過去の内容を表していると考えます。
この if 節の内容は特に問題ないでしょう。

主節の **would have never had** は「絶対に～しなかつただろう」という推量の意味で解釈します。この部分だけをカギカッコでくくって訳しましょう。

全体のつなげかたは自然になるよう自分なりに考えてみてください。